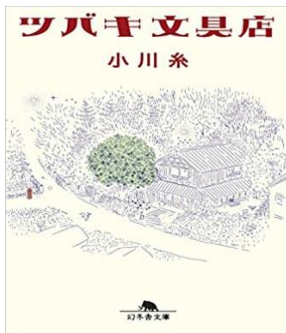


話題を本に変えます。

私に本を読むきっかけを与えてくれたのは、武者小路実篤の「友情」(1919年)、「愛と死」(1939年)でした。愛読書と言えば「ジャンプ」「ヤンジャン」「マガジン」そして「湘南爆走族」だった私は、文学部への大学進学が決まり、『何か読まなくては』と焦って本屋へ行き、ふと目についたのが『何となく凄そう』な武者小路実篤という6文字でした。当時は月9のトレンドードラマが最盛期で、今年リメイクされ放映予定の「東京ラブストーリー」もその1つでしたが、武者小路実篤の小説の世界もなかなか負けてはいません。



また、鎌倉山の裏に住んでいた私は、高校時代、鶴ヶ岡八幡宮前の峰本(そば屋)でバイト(時給650円)をし、大学進学後は鎌倉の町中を軽トラで灯油配達(日給14,000円)もしました。そのおかげで鎌倉界限には少しだけ詳しくなったので、『小川糸作「ツバキ文具店」(2016年) 幻冬舎文庫』、『キラキラ共和国』(2019年) 幻冬舎文庫』は読まずにはいられません。南高の図書室にも2冊並んで配架されています。

本を選んだり、読んだりするきっかけは人それぞれです。

皆さんは「広辞苑」という辞書を手にしたことはあるでしょうか。私は、「広辞苑」のページをめくるときに何とも言えない手触りのよさを感じていましたが、三浦しをん作の『「舟を編む」(2011年) 光文社 2012年本屋大賞受賞作品』でその感覚を見事“ぬめり感”と言い表してくれたことがきっかけで、同作家の文楽を題材とした『「仏果を得ず」(2007年) 双葉社』に手を伸ばし、今通勤のバス・電車では古典芸能繋がり世阿弥の「風姿花伝」(1400年~1420年)を読んでいます。



これからも、自分の人生を彩り豊かにしてくれる1本や1冊に出会えるといいのですが・・・、

皆さんはいかがでしょう。

